

# Hands<sup>ome</sup>

## CONTENTS ◆10月例会開催 ◆特集シリーズ 中央会スペシャル

●OB交流会レポート ●45周年実行委員会 各部紹介 ●委員会紹介 ●会長連載「Spur」

◆鳥取県西部中小企業青年中央会 会長 秋里武信 ◆編集責任者/担当 副会長 権田和志 ◆制作・編集 第44期広報委員会/委員長 恵比木 健

## 10月例会開催

## 時代と共に変化する雇用と求人を考える



平成30年10月15日(月)米子市文化ホールにて10月例会が開催された。秋里会長は冒頭の挨拶で「去年に引き続き政治行政委員会には人材雇用に着目して活動を行っている。今例会のテーマは時代に適応する雇用。個人事業主である私は仕事と会の活動で忙しい日々を送る中、人材が欲しいと思った時にどうアプローチをしていいかと悩んでいる。どこの会社においても今一番の重要課題だと思っているので、しっかり学んで自社に持ち帰っていただきたい」と述べられた。



次に新入会員バッジ・手帳授与では宇佐見啓輔会員が「積極的に参加していきたい」と思いを述べられた。

続いての委員長タイムではビジネス経営委員会中村委員長が委員会内で学んでいる事業を伸ばす重要項目の中から「売上げ」について紹介された。最後に「デフレやマーケットの縮小などで環境が変化し続けているが、売れない時代がきても安定して経営できる仕組みを考えなければならぬ」とまとめられた。



本例会は、鳥取県が求人・雇用の促進のために独自で行っている施策に着目し、鳥取県立米子ハローワーク所長 福間修一氏と企業支援担当就業支援員 田中明仁氏のお二人をお招きして、人材雇用の解決の足がかりとすることを目的に開催され



た。第1部では「鳥取県の雇用情勢と県立ハローワークの概要」について講演会を行い、県内の雇用情勢と県の取組、県立ハローワークの概要と特徴や企業支援内容、各種助成制度などを学んだ。第2部では「求職者の考えと企業の思い」というテーマで求職者は何を考えて職を探しているのか、若年層、シニア層、女性それぞれの傾向、地元高校生や先生からの声を松田順次会員が「求職者の求めていること」として発表した後、「企業からの要望」、「求職者を増やすためには」、「これからの働き方について」について6組のグループでそれぞれディスカッションを行い活発な意見を交わしあった。最後の第3部では「これからの雇用の在り方について」として、第2部で各グループが集約した意見を発表し、それに対しての意見や感想を福間氏、田中氏よりご回答いただいた。



最後に西田副会長が「現状として、中小企業の多くが人手不足を実感している。今回の講演で、県立ハローワークという雇用に繋がる新たなツールをより詳しく学ぶことが出来たので、連携をとりながら雇用のあり方に対して積極的に取り組んでいきたい」と総括され例会をしめくくった。

本例会は多くの企業が抱える人手不足という問題を業種の垣根を超えて議論し、あり方や考え方を深めることができた内容となった。

(記事:青戸)

## 10月例会を終えて

水野孝一 (ステッカー工房 代表)



10月例会に多くのご参加を頂き、ありがとうございます。会員の皆さまに企業側と求職者の考えの違いを知って頂くためにも時代に合った雇用と求人について例会を企画して参りました。

第1部では県立米子ハローワークの福間所長様、田中支援員様に全県、とくに西部地区の雇用求人倍率が高水準であること、また、県立ハローワークの仕組み・概要などを説明して頂きました。

第2部では求職者や学生の声を聞くことで、雇用に対して改めて考えるきっかけになったのではないかと思います。企業側の立場よりディスカッションを行いました。活発な意見が飛び交い会場が盛り上がり、ホッとしたのと共に非常に嬉しく思いました。

第3部ではディスカッションでの内容を基に福間様、田中様と意見交換を行いました。企業側の考えと求職者側の思いについて今後、企業と行政が情報を共有することで、雇用問題解決の足掛かりになればと思います。

10月例会に向けてご尽力して頂いた委員会メンバーの皆さまに感謝すると共に、当日ご参加頂いた会員の皆さまにお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

# 中央会スペシャル



File.02

## トライアスロン特集（歴史編）

～沸騰!!中央会トライアスロン魂～

企画構成 赤井(リーダー)、石田、岡田、福山

西部青年中央会は単年度事業を活動の主としていますが、『全日本トライアスロン皆生大会』へのボランティア支援を毎年の継続事業として行っています。これは、第13期(中村昌哲会長)時に継続事業とする事が総会で決議され、今なお続いているものです。経済団体である中央会が何故スポーツ事業の支援を行っているのか。これを継続事業としている理由な何なのか。

中央会がボランティアを始めた初期から携わり、現在も鳥取県トライアスロン協会で大会運営に携わっている【野嶋功OB】と、ボランティア活動が熱を帯び、中央会でトライアスロン検討・実行委員会が設立されていた時期に、その様子を第27期会長という目線から見ていた【岩田慎介OB】にお話を伺いました。



29期卒会 野嶋 功OB  
(北条レンタカー米子営業所 所長)

これは面白い、から始まった。  
ボランティアをする側も、しっかり楽しんでもらわないと。

一中央会がボランティアを始めたきっかけは。

第6回大会の時に、会から出場した会員を応援するために、バスを出して20人程乗せて繰り出した。自転車で60km/h出ている選手に並走して声援を送ったりした。今じゃ考えられない(笑)

そして、当時3~4人くらいしかボランティアが居なかったエイドステーションに乗り付けて、勝手に手伝いをしていた。それで、『これは面白い』となって、『次の年から中央会にひとつエイドを貰おう』という話になった。

ボランティアとはこうあるべきだ、と色々と言いたがる人もいるようだが、そもそもの取っ掛かりが『楽しい』な訳で。ボランティア側も楽しんでやらないといかん。やって面白くなかったらやる必要がない。

一中央会の継続事業にする際は揉めなかったか。

当時はボランティアを始めて2、3年で、それが楽しい時代だった。決議した中村昌哲さんも後に『そんな事をしただろうか』って言うていたくらいだし、そこまでキツクリしたものではなかった。

ただ、中央会の活動は1年単位の物ばかりで、継続的な活動も必要ではないかと議論されていた頃だった。そんな中で出てきたボランティアだが、1年毎にやる・やらないの話をする訳にもいかない。トライアスロン皆生大会自体も、今後継続していかないと発展性を持たない。大会の継続を支援するという意味で、会のボランティアを継続事業とした。

一継続事業になってからも、色々議論があったようですが。

14回大会の時に、トライアスロンへの取り組みを考え直す特別委員会が中央会で設立された。その際、地域の経済団体として、トライアスロンを継続的に応援していかないといけないという方向性を確認した。その際、11月委員会に松田一三(当時県会議員・当会OB)さんをお呼びして、県に対しても協力を願ひ出た。

その後、水面下で県や県警に対して働き掛けを続け、12月議会で松田さんが大会支援を要請する代表質問を行い、15回大会から、県より1千万円の補助が出るようになった。これは30回大会まで毎年続いた。

汗をかいてボランティアをするのももちろん良いが、こういう関わり方も中央会ならではのと思う。



28期卒会 岩田慎介OB  
(機福栄 代表取締役)

火傷しそうなくらい熱を帯びていた。会員同士、議論が衝突した事もあった。それは素晴らしい衝突だ。

一中央会とトライアスロンの関わりを見直す特別委員会が開催されていたそうですね。

中村(昌哲)さんの時から続いていたボランティアだが、自分が会長になった頃にはそれが熟成し、火傷しそうなくらい熱を帯びていた。

本来はトライアスロンを成功させるためのボランティアだったが、熱を帯びてくるとその中で激論・衝突が起きて来た。それは素晴らしい衝突だ。一生懸命が故に、想いや愛情を持った会員が増えてきた。役員会でもトライアスロンの議論に随分と時間を割いていたし、酒の席で『トライアスロンとは…』なんて語る奴も多かった。当時は大変に盛り上がっていた。すごい熱量だった。

ただ、会長の自分までそのスタンスでいると、中央会自体が上手いかなくなるのが考えられる。トライアスロンは会の事業の一部でしかない。自分は距離を置いて、第三者的な目線で冷静に見るようにしていた。

一会員間の熱量にも差があったようですが。

会長時代の経験から言わせてもらうと、活動に熱を帯びていたが故に、協力の度合いが薄い会員の評価が低くなる傾向があった。それは良くない。熱量の強さによって扱いを変えるような事は排他しなくてはいけない。

どうしても参加しづらい人もいる。それはそれで冷静に理解をしなくてはいけない。『それでいいんだよ、ありがとう』と言ってあげる事が会にとってプラスになるし、言われた側は『次は頑

張って参加しよう』となる。  
 そういう付き合いをするのが大人の会だ。

一特別委員会は3期ほど続いて設置されていたのですが、  
 1年では解決に至らなかったという事。今でも中央会がトライアスロン支援を続けているということは、その時の議論が生きているという事。中央会とトライアスロンはもはや離すに離せないものだ。  
 今後どういう付き合い方をしていくのかは、その時々の方針の考え次第だが、トライアスロンに魂を懸けてきたというのは、理解して欲しい。中央会は色々な活動をしてきているが、一番はやはりトライアスロンではないだろうか。OBは現役に会を託しているが、もしトライアスロンへの支援が無くなったら、寂しく感じる人が多いだろう。  
 始まった動機は不純かもしれないが(笑)、物事の始まりなんてそんなものだ。



▲雄飛23号(1997.8発行)より

今回は過去検証ということで、当時の事を中心にまとめさせていただきました。  
 所謂『ノリ』『なんとなく』『面白い』から始まったボランティアのようですが、次第に熱と真剣味を帯び、トライアスロン協会のみならず地域や県を動かす、中央会の代名詞的な基幹事業となっていく背景を知ることができました。  
 今、中央会はお地蔵さまプロジェクトという新しい継続事業をスタートさせていますが、これを継続させていくのに必要な事は、もしかしたらトライアスロンと同じなのかもしれません。  
 今後掲載予定の後編では、これからの中央会がどのようにトライアスロンへ携わっていったら良いかという点をお聞きした『未来編』を掲載したいと考えております。こちらも宜しくお願い致します。  
 (記事:石田)

**権田**  
副会長の

## OB交流会レポート 新OBを迎えて賑やかに開催

10月5日(金)海王にてOB交流会(新OB会員認証式及び歓迎会)が開催された。  
 冒頭、土井OB会長より新OBに向けて「ようこそOB会へ、これより厳正な入会審査を行う」とご挨拶され会場に緊張感が漂う中、認証式の幕が開けた。「OB会への入会意思と覚悟があるのでこの場に参加していると思う」「入会が承認されればOB会の全事業へ参加するように」と先輩OBより激励の言葉のあと、新OB全員が満場一致でOB会入会を承認された。新OBの皆さんが語られたうち浜田貴稔新OBは「短い在籍期間で様々な役職をさせて頂き勉強となった。OB会員として、この恩を現役会員に対して返したい」と力強く意気込みを語られた。  
 その後の歓迎会では土井OB会長より名酒の振る舞いもあり、美味しいお酒と料理を囲みながら現役会員とOB会員が現役時の昔話などで盛り上がり、各処で笑い声が絶えない交流会となった。  
 (記事:権田)

# 45周年実行委員会 企画運営部・財務部 映像部 紹介

**企画運営部・財務部 部長 中西 悠介** (株LABO 工事部次長)

45周年事業実行委員会、企画・運営部部長を務めさせていただいております中西悠介です。  
 9月に第1回実行委員会が開催され本格的に45周年事業が動きだしました。  
 企画・運営部は式典・祝賀会・基調講演、実行委員会の運営を担当させていただき、財務部に関しましては金山副委員長が部長を務め全体の事業予算、出入金の管理等を担当して各部と連携して進めています。  
 私自身、周年事業が初めてで知らなかった事も多々あったのですが、会の諸先輩方から様々な事を教えていただき学ぶ事も多く、部長としての責任の大きさや重大さを実感しております。  
 45周年事業のスローガン『繋ぐ』を基にOB会員の皆様と現役会員の皆様繋がる45周年事業を目指し、更には50周年事業にしっかりと繋いでいきたいと思っております。皆様どうぞよろしくお願いいたします。



**映像部 部長 野口 浩一** (川中・野口法律事務所 弁護士)

45周年事業実行委員会の映像部の部長を務めさせていただくことになりました。  
 映像部は、総務・45周年記念事業委員会の砂原会員、安達(大)会員と、山内委員長率いる地域ビジョン委員会のメンバーで構成されています。ちょっと怖いけど頼もしいメンバーに囲まれて非常に心強いです。  
 映像部の仕事は、来年7月に予定されている45周年記念式典で上映されるオープニングムービーを制作することです。35周年と40周年を経験させていただいたことを生かして、会場にお越しいただく皆様をぐっと引き込むことができるムービーを作り、50周年に繋げていきたいと思っております。  
 これから40期から今期までの活動を振り返ってオープニングムービーの構成を決め、インタビュー撮影などを行っていく予定です。OB会員のみならず含めまして、今後いろいろとお願いすることがあると思っておりますが、ご協力いただきますようお願い申し上げます。

